金田一春彦博士古稀記念論文集
vol.1（国語学編） Sanseido, 1983

(21) 注(7)第一論文、単行本五五四ページ。
(22) 松本光隆「平安鎌倉時代における医書の訓読について」(『国文学攷』第八十七号 昭55・9)
(23) 馬渕和夫『和名類聚抄 古写本声点本 本文および索引』(昭48・6)解説一二ページ。
(24) 築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』九七六ページ。
(25) 石塚晴通『図書寮本日本書紀 本文篇』四〇三―四一三ページ。以下、前田家本及び図書寮・前田両本の比較についても、同論文による。
(26) 秋永一枝『古今和歌集声点本の研究』
(27) 注(7)第一論文。
(28) 大野晋「仮名遣の起原について」(『国語と国文学』第二十七巻第十二号 昭25・12)
(29) 築島裕「無窮会本大般若経音義のオ・ヲの仮名遣について」(『訓点語と訓点資料』第五十四輯 昭49・5)

追記　本稿を成すに当り、宮内庁侍従職、醍醐寺、石山寺、東寺、高山寺、大東急記念文庫、天理図書館、その他諸寺、諸図書館の関係御当局、関係調査団の各位より、格別の御高配を賜った。又、小林芳規博士、松本光隆氏には、多大の御助力を頂いた。厚く御礼申上げたい。

日本書紀の音仮名とその原音声調について

――上代アクセントとの相関性を考える――

高山倫明

一

日本書紀（養老四年（七二〇）、舎人親王等撰。以下、書紀と略称する）の歌謡・訓注を記す一字一音節式の音仮名の諸性格についてはすでにいくつかの指摘があるが、①日本語の同一音節を表わす音仮名字種が豊富であり、②音仮名の背景にある漢字音には、唐代西北方音に起源をもつ新来の漢音を多く採用している、という二点は、その表記原理を考えるにあたっては殊に重視すべき特徴かと思う。

これらは、いずれも、書紀が官撰の正史として政治外交上の意図のもとに編修されたところと密接な関連があり そうであるが、従来①の特徴については、所謂「変字法」に関する諸議論と相俟って、可視的側面における表現効果にのみ注意が向けられていたように思われる。

ところで、同一音節に用意された複数の字母（これを、以下、仮に同音節複数字母と称することにする）は、多いもの

では20種を越え、平均すれば一音節につきおよそ6種の字母が存する計算となる。これは表音文字の体系としては甚だ未整理な状態にあると言わねばならないが、それでいてなお表音の機能を果し得ているのは、字母と、それが標示するところの日本語音節との間に漢字音の介在があるからにほかならない。すなわち書紀音仮名はあくまで漢字の間接的利用（借音）であって、未だ日本語の音節文字として独立し得たものではない。その点、後世の所謂〝仮名〟の体系とはその表記原理において一線を画していると言わねばなるまい。同音節複数字母の存在は、その同定にあたり、書紀の読者に漢字音に関する一定の知識を要求するとともに、②の事実が、その知識の最新なること（当時において）をさらに要求したであろう。

こうしてみると、①の特徴も、②のそれとともに音的側面においてこれを新たに捉えなおし、再吟味してみる余地があるように思われる。書紀音仮名表記における同音節複数字母は、表音のレヴェルにおいて真に等価値にあるものばかりなのかどうか――、先ずはその点から考えて行くことにしよう。

二

『岩崎本日本書紀』（巻二十二推古紀・巻二十四皇極紀の二巻）は、書紀訓点本中現存最古のものであるが、その歌謡・訓注に差された声点は、平声軽の点を有する六声の体系に立ち、平安末期頃のアクセント資料の一つとして重要視されているものである。

今、岩崎本の皇極紀（巻二十四）について、歌謡・訓注の音仮名表記における同音節複数字母を整理し、個々の字母に対する声点の加点状況を見てみると、[1] そこに左のような傾向が観察される。

〈a1〉同一の字母には同じ位置の声点が差される場合が多い。

〈a2〉従って、声点の位置の相違によって字母をある程度まで分類することが可能である。

若干の例を挙げると次の如くである。

「タ」

多　多寐底（食げて）、岐多麻須（懲ます）

陀　陀豆矩梨（手作り）、陀底屢（立てる）

拕　倭拕羅務（渡らむ）、拕我（誰が）、烏知可拕（彼方）

「キ甲」

岐　比岐例底（引入て）、岐多麻須（懲ます）

枳　枳擧喩屢（聞ゆる）、枳擧曳倶屢（聞え来る）、枳々始（雉）

「ク」

倶　野倶（焼く）、倶屢（来る）、倶毗那（水鳥）

矩　陀豆矩梨（手作り）

「コ乙」

渠　渠梅（米・計2例）、渠騰（言）

擧　擧會（こそ・助詞）、枳擧喩屢（聞ゆる）、枳擧曳倶屢（聞え来る）、騰擧預（常世）

これらに対しては、平声点・上声点の差声状況から《多陀岐倶渠／拕枳矩擧》といった分類ができそうであり、一見、字母の視覚的な違いに応じて声点が機械的に差し分けてあるかのようでさえある。しかし、その声点が平安

末期頃のアクセントに拠っているらしいことは類聚名義抄その他の諸アクセント資料との対比からみても動かぬところであり、音的側面において加点がなされていることに疑問をはさむ余地はなさそうである。そこで、〈a1〉の傾向性が単なる偶然ではないとするならば、〈a2〉の如き字母分類の可能性は、皇極紀音仮名表記者による音レヴェルでの使い分けに由来するものではないか、と想像されるのである。そしてその当否は、一に使い分けの原理・基準の究明にかかっていると言えよう。

さて、声点が音声の pitch にかかわるものである点を思えば、ここで先ず予想されるのは、音仮名の原音声調との関連であろう。〔表Ⅰ⑩〕は、同音節複数字母の各字に対する差声状況（数字は加点件数を示す）をまとめるとともに、各字の原音声調の調類を切韻系韻書の一つ「刊謬補缺切韻」に拠って示したものである。

なお、原音声調の調類の呼称との混乱を避けるため、本稿では、以下、声点に対し次の呼称をとることにする。

平声点——→1声点　上声点——→2声点　去声点——→3声点　平声軽点——→f声点

この表から、我々はある種の傾向性を見出すことができそうであるが、その点をより明確にするために、次の如き操作を加えることにしよう。

(1) 〔表Ⅰ⑩〕のうち、二回以上の加点件数をもつ音仮名（従って皇極紀音仮名表記中、二箇所以上に現れる音仮名）で、そこに差された声点の常に同一であるものを抜き出して〔表Ⅰ①〕とする。

(2) 常に同一の声点が差されるとは言えないものの、声点にある程度の偏りのみられる音仮名をまとめて〔表Ⅰ②〕とする。具体的には、75%以上の比率をもって一種類の声点に偏るものを収めた。すなわち4例中3例までに同一声点が差されているような場合を最下限として、偏向ありと認めたわけである。

(3) 参考として、加点件数1のものをまとめて〔表Ⅰ③〕とする。

〔表Ⅰ⑩〕

節母類	音字	調	声点 1	2	f
カ	歌	平	1		
	柯	平	5		
	紇	上		1	
	可	上		1	
サ	娑	平	1		
	佐	去	2	3	
	作	去入	1		
タ	多	平	2		
	陀	平		2	
	拕	平			3
ハ	波	平	4		
	播	去			2
ラ	羅	平	3		
	囉	平	2		
甲キ	岐	平	2		
	枳	上			4
乙キ	基	平	1		
	紀	上	1		

節母類	音字	調	声点 1	2	f
シ	斯	平	1		
	之	平	4		
	始	上	1		
チ	知	平	1		
	智	去	1		
ニ	爾	上	1		
甲ヒ	毗	平	2		
	比	去上平	1	3	1
ウ	宇	上	1		
	禹	上		1	
ク	倶	平	3		
	矩	上		2	
ズ	儒	平	1		
	瑞	去	2		
ム	武	上	1	1	
	務	去	1		
セ	栖	去	1	1	
	制	去			2

節母類	音字	調	声点 1	2	f
テ	提	平	1		
	底	上	2	3	
乙メ	梅	平	2		
	毎	上去			1
オ	於	平	1		
	飫	去	1		
乙コ	渠	平	3		
	擧	上		4	
ホ	褒	平	1		
	哀	平	1		
モ	謀	平	4		
	母	上	4		
乙ヨ	余	平	2		
	預	去	1		
ヲ	嗚	平	1		
	烏	平	1	5	
	乎	平			1

さて、〔表Ⅰ②〕から差声状況に偏向のみられぬ字母6種（佐羅比栖底母）が脱落し、その分を割り引いて考える必要があるが、右三表における1声点・2声点に対する原音声調の傾向性には注目すべきものがあると言えよう。これらの表から得られるところをまとめると次のようになる。

〈b1〉 原音声調が平声の音仮名は1声点の差される傾向が強い。

〈b2〉 原音声調が非平声の音仮名は2声点の差される傾向が強い。

〔表Ⅰ①〕

音節	1声点	2声点
カ	柯(平) 5	
タ	多(平) 2	陀(平) 3
ハ	2	
ラ	囉(平) 2	
キ甲	岐(平) 2	枳(上) 4
シ	之(平) 4	
ヒ甲	毗(平) 2	
ク	倶(平) 3	矩(上) 2
ズ	孺(去) 2	
セ		制(去) 2
メ乙	梅(平) 2	
コ乙	渠(平) 3	擧(上) 4
モ	謀(平) 4	
ヨ	余(平) 2	

音節	1声点系	2声点系
ハ	波(平) 4 5	
シ		
ニ		
ヲ		烏(平) 5 6
		始(上) 5 6
		嗣(上) 3 4

〔表Ⅰ②〕

※〔表Ⅰ①〕内の数字は加点件数。〔表Ⅰ②〕内の分数は、分母が全加点件数、分子が同一種声点の加点件数。

〔表Ⅰ③〕

音節	1声点	2声点	f声点
カ	歌(平)	嗣(上) 可(上)	
サ	作(平) 作(去入)		
キ乙	紀(平)	基(平) 紀(上)	
シ	斯(平)		
チ		知(平) 智(去)	
ニ		爾(去)	
ウ		宇(上)	
ズ	儒(平)	禹(上)	
ム		武(上) 務(去)	
テ	提(平)		
メ乙		毎(上去)	
オ	於(平)	飫(去)	
ホ	袁(平) 哀(平)		
ヨ乙		預(去)	
ヲ		嗚(平) 乎(平)	

〈b3〉 原音声調上声と去声の間には、さしたる傾向差が見られない。

また、声点の示す具体的な調値を考慮に入れるなら、〈b1〉〈b2〉はおよそ次のようにも表現できよう。

〈b1′〉 原音声調が平声の音仮名で記された音節は、同一語の平安末期頃のアクセントでは低拍を有する場合が多い。

〈b2′〉 原音声調が非平声の音仮名で記された音節は、同一語の平安末期頃のアクセントでは高拍を有する場合が多い。

ここから、《皇極紀音仮名表記は、音仮名の原音声調を基準に使い分けられ、述作時の日本語のアクセントを反映している可能性がある》との推測がひとまずなされるかと思うが、もしそうだ

とすれば、同音節複数字母のすべてが表音レヴェルにおいて全くの等価値を有するとは、必ずしも言えないことになるのである。

以上は同音節複数字母についての観察であるが、次に、本巻においてはたまたま複数の字母をもたない音節をも含め、皇極紀音仮名全体を原音声調との関連のもとにながめておくことにしよう。

〔表Ⅱ〕

歌謡番号	106			107			108			109			110			111			112		
調類	去	上	平	去	上	平	去	上	平	去	上	平	去	上	平	去	上	平	去	上	平
1	1	2	9		2	17	2	3	12			8			14	3	2	8	1	1	13
2	3	1	8	4	3		1	11	5	7		1	3	7	5	3	7	4	3	4	5
f				1				2			1		1				3			2	

総合	去	上	平
1	12	16	136
2	35	66	40
f	2	10	4

引用部分	去	上	平
1	4	5	45
2	14	23	10
f	1	3	2

訓注	去	上	平
1	1	1	10
2		2	
f			

総歌謡合	去	上	平
1	7	10	81
2	21	41	30
f	1	7	2

原音声調の調類と個々の音仮名への差声状況との関係を、各歌謡及び訓注について見ると〔表Ⅱ〕のようになっている（表内の数値は加点件数。但し複調字（後述）への加点はその数値に含めない）。なお皇極紀では四首の歌謡につき〝ワザウタ〟としての予兆的な解釈を施した部分があり、その際に既出の歌謡が引用され重出しているが、使用音仮名字母等に若干の異同があるので、それらについてもともに見ておくことにする。さてこの表を通覧すると、歌謡によって多少の程度差はあるものの、〈b1〉～〈b3〉とほぼ同様の傾向が見出され、ここからも音仮名原音声調が述作時の日本語のアクセントと無関係ではなさそうなことがおよそ推察されるのである（尤もf声点については加点件数が僅少のためはっきりしない。強いていえば非平声の音仮名により多く差されている）。

ただ残念なことに、本巻における観察結果からただちに書紀全体を推し量ることはできないようである。すなわち、岩崎本にはこの皇極紀とともに推古紀（巻二十二）が存するが、推古紀音仮名表記における同音節複数字母の整理からは先の〈a1〉のような傾向性は見出し難く、従って〈a2〉の如き分類もほとんど成し得ないのである。〔表Ⅰ①②③〕に倣って〔表Ⅲ①②③〕を上に示すが、①②表所収の計14字種に対し「多弭奈波摩夜比瀰伊斯流余豫」の13字種が②表から脱落してしまう（皇極紀では①②表所収の計23字種に対して脱落字母は6字種であった）うえ、差声状況と原音声調との間にも特に関連は見出せない。

岩崎本の推古紀・皇極紀の二巻は、ともに同筆の書写になる僚巻であり、恐らくは声点（朱初点）も差声者を異にするもので

〔表Ⅲ①〕

節 / 音	1声点	2声点
カ	箇（去） 2	
ハ		破（去） 2
キ 甲		枳（上） 3
シ	之（平） 2	
ニ		珥（去） 2
ツ		都（平） 3 / 苑（去） 3
テ		弖（平） 4
コ 甲		古（上） 3

〔表Ⅲ②〕

節 / 音	1声点系	2声点系
カ		伽（平） 3/4 / 訶（平） 4/5
シ	志（去） 3/4	
ニ		爾（上） 3/4
ス		須（平） 3/4

〔表Ⅲ③〕

節 / 音	1声点	2声点	f声点
カ	河（平）		
サ	差（平）	佐（去）	
タ	陁（平）		
マ		麻（平）	
ヤ		椰（平）	
キ 甲		耆（平） / 岐（平）	祇（平）
ヒ 甲			譬（去）
ミ 甲		弭（平）	
イ	異（去）		
チ	知（平） 智（去）		
ス	酒（上）		
ル		留（平） 屢（去）	
テ	提（平）		
コ 甲		切（平）	

はあるまい。そこで、両巻における観察結果の差異は、音仮名表記の性格上の差によるものかと想像されるのである。

三

これまでの観察結果をふまえ、以下に書紀全体についての概観を試みようと思う。作業の概略は次のとおりである。

(1) 書紀の音仮名は、歌謡及び訓注のものに限る。

(2) それら音仮名の漢字原音をひとまずすべて中古音と仮定し、各音仮名の原音声調（調類）を切韻系韻書によって決定する。

(3) 原音各調類の音仮名連続上における配列様式と、その音仮名連続が示す語句の平安末期頃におけるアクセントとの対照を行なう。

作業用底本には大野晋氏『上代仮名遣の研究』後篇「日本書紀歌謡及び訓注語彙総索引」の本文篇を使用したが、数箇所に改修を加えた。(2)

切韻系韻書としては、「唐写全本王仁昫刊謬補缺切韻」（神龍二年（七〇六）撰と推定される。所謂〝完本王韻〟）を使用する。(3) 書紀音仮名中には本書に見えぬ漢字も若干数存する（いずれも出現頻度の極度に低い特殊仮名である）が、『十韻彙編』（台湾学生書局影印）所収の諸本及び「広韻」を参照するなどして適宜処理を行なった。(4)

また、原音において、複数の声調を有し且つ segmental な部分に差異のないもの(5)（例えば「逝」＝平声哥韻七

河反・上声呼韻千可反でともに〔ɑ̃ŋ〕の如き音）については、声調の決定をひとまず保留し、数値のみを求める際にはこれを数えないこととする（先に、仮に複調字と称したものがこれである）。

次に平安末期頃のアクセントとの対照であるが、これは書紀述作時、すなわち奈良時代のアクセント体系が現在ほとんど解明されていないことによる次善の策である。周知のように、平安末期は豊富なアクセント資料に恵まれ、かなりの精確度をもってアクセント体系が再構されている時代であり、また、アクセントの通時的変化が体系に則したものであることを思えば、当面の目的すなわち原音声調とアクセントとの関連の有無を探るにあたっては、一方法たり得るかと思う。

具体的なアクセント資料としては、同一文脈内の同一語句のアクセント形がほぼ確実に用意できるという利点から、前章同様に声点付書紀古写本群を使用することにする。作業に用いた古写本は左に示すとおりである。なお、各写本間に書写年代の大きな開きがあり、従って声点の加点時期も各時代に亙るものと思われるが、表示されたアクセントの内容から見て、いずれも基本的には平安末期頃のアクセントを伝えているものと判断される。

○巻一・二	E	○巻九・十	F	○巻二十二	A
○巻三	D_4	○巻十一	B	○巻二十三	C
○巻四	×	○巻十二～十六	C	○巻二十四	A
○巻五	F	○巻十七	B	○巻二十五～二十七	D_1
○巻六	D_4	○巻十八・十九	×	○巻二十八～三十	D_2
○巻七・八	×	○巻二十	B		

A＝岩崎本（平安中期）、B＝前田本（平安後期）、C＝図書寮本（院政期）、D_1＝北野神社本第一類（院政初期）
D_2＝同第二類（鎌倉初期）、D_4＝同第四類（室町後期）、E＝弘安本（鎌倉中期）、F＝熱田本（室町後期）
※（ ）内は書写年代。岩波古典文学大系『日本書紀』(上)の諸本解説、及び各複製本解説等を参照。×印は声点付古写本の不在を示す。なお、いずれも原本には接し得ず、複製本その他に拠った。(6)

右の方針に従って行なった作業の結果を、以下、歌謡と訓注とに分けて見て行くことにしよう（歌謡と訓注の音仮名について、その質的差異がしばしば説かれている）。

1　歌謡

各歌謡につき、《平声――1声点、非平声――非1声点》の対応を示す音仮名数の、全体に占める比率を算出すると〔表Ⅳ〕のようになっている。

40％に満たぬものから90％以上のものまでと、各歌謡の示す数値にはかなりのばらつきが見られるのだが、今、仮に70％以上の対応率を示すものを太字で示すことにすると、それらは特定の巻々に集中して見出される傾向にあり、この点が先ず注目される。この〝偏在〟は、これら比較的に高い対応率が単なる偶然の産物ではないことを暗示するとともに、所謂「書紀区分論」の観点からも、大きな意味をもつものと言えそうである。すなわち、書紀が決して一元的な成立を見たものではなく、巻々によって述作者や述作時期に差異があったであろうということが、これまでにも各巻の語句語法あるいは音仮名字種等における様々な内部徴候から明らかにされて来たからである。

今、〔表Ⅳ〕に合わせ示したところの、岩波日本古典文学大系『日本書紀』(上)解説が従来の諸説をとりまとめてなした書紀区分（A）、及び、特に音仮名の偏向現象に拠ってなされた太田善麿・西宮一民・森博達の三氏の御説

〔表Ⅳ〕

巻数	歌謡番号	対応率	書紀区分論 A	B	C	D			
一	1	80				Ⅰ・Ⅱ統合			β群
二	2 3 4 5 6	61 60 41 67 63							
三	7 8 9 10 11 12 13 14	76 83 73 61 86 89 71 80							
五	15 16 17 18 19 20	63 67 57 65 53 60							
七	21 22 23 24 25 26 27	× × × × × × ×							
九	28 29 30 31 32 33	60 63 37 54 56 48							
十	34 35 36 37 38 39 40 41	50 62 54 48 54 62 36 53							
十一	42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63	74 67 59 72 67 33 41 53 48 65 65 49 38 56 71 39 40 50 52 66 47 60							
十二	64	52							
十三	65 66 67 68 69 70 71 72 73	60 67 60 53 60 64 52 48 58							
十四	74 75 76 77 78 79 80 81 82	70 69 61 56 62 70 62 67 87							
十五	83 84 85 86	69 52 48 50							
十六	87 88 89 90 91 92 93 94 95	52 47 62 74 76 64 48 54 81							
十七	96 97 98 99	68 57 77 66							
十九	100 101	× ×							
廿二	102 103 104	42 70 52							
廿三	105	54							
廿四	106 107 108 109 110 111 112	61 84 77 95 87 69 73							
廿五	113 114 115	72 79 83							
廿六	116 117 118 119 120 121 123	90 76 47 58 82 80 93							
廿七	124 125 126 127 128	69 67 61 71 50							

伊 Ⅰ系列 β群
呂 Ⅱ系列 α群
イ Ⅰ系列 β群
ロ Ⅱ系列 α群

※書紀区分論
A＝岩波古典文学大系『日本書紀』(上)解説。
B＝太田善麿氏『古代日本文学思潮論Ⅲ―日本書紀の考察―』第二章「日本書紀の部分的徴候」
C＝西宮一民氏『日本上代の文章と表記』Ⅱ部2「日本書紀の仮名と巻々の成立」
D＝森博達氏「《日本書紀》歌謡における万葉仮名の一特質―漢字原音より観た書紀区分論―」(『文学』45―2)

〔表Ⅴ①〕

節音	1声点	2声点
カ	伽(平) 4	
サ	遠(平上) 3	佐(去) 5
タ	多(平) 2	哆(平上去) 8
ナ	那(平) 5	奈(去) 4
パ	磨(去) 2	
マ	摩(平去) 3	莽(上) 7
ヤ	郷(平) 2	
ラ		邏(去) 3
ワ	和(平去) 4	
イ		異(去) 3
キ乙		氣(去) 2
シ	之(平) 10	
ニ	而(平) 4	珥(去) 7
ヒ甲	毗(平) 4	
ウ	于(平) 7	宇(上) 3
ク	倶(平) 3	
ズ	儒(平) 2	
ム	牟(平) 2	務(去) 6
コ甲		故(去) 2 2 固(去) 2
コ乙	虚(平) 2	居(平) 4
ノ乙	能(平) 14	廼(上) 4
ホ	朋(平) 2	倍(上) 2
モ	毛(平) 12	茂(去) 6
ヲ		烏(平) 3

〔表Ⅴ②〕

節音	1声点系	2声点系
ハ		破(去) 8 10
イ	伊(平) 9 12	
シ	辞(平) 3 4	
ヒ甲		比(平上去) 4 5
ト乙	苫(平) 7 9 等(上) 4 5	

〔表Ⅴ③〕

節音	1声点	2声点
カ		箇(去)
ダ		太(去)
マ	末(入)	
ワ		波(去)
キ乙	幾(平上)	機(平)
チ		知(平去) 致(去)
シ		時(平)
ヒ甲		譬(去)
ク	句(平去)	勾(平去)
ス		輸(平去)
ズ	孺(去)	
ツ	途(平) 屠(平)	
ユ	由(平)	喩(去)
ル	盧(平)	屢(去)
エ	陪(平)	
ヒ	齊(平)	勢(去)
ホ	賛(去)	

(BCD)を見てみると、〝高対応率〟歌謡の偏在する巻々が一定の区画内に比較的よく収まっているように思われるのである。

尤も、巻三神武紀に関してはやや問題が残る。Aにおいて神武紀に一区画が与えられたのは、主として即位定都の記述様式に拠るものであるが(7)、音仮名に注目してなされたBCDの区分では、神武紀は特立されていないのである。しかし〔表Ⅳ〕に見る如く、巻三に無視し難い傾向性の看取されるのもまた事実である。

試みに神武紀歌謡音仮名における同音節複数字母を整理し、〔表Ⅰ①②③〕の分類に従って〔表Ⅴ①②③〕とすると、上のようになっている。

②表から脱落する字母も少なくなく

(①⑧表所収の計42字種に対し「介儞波廼夜羅易耆智志利區都惠塢」の15字種)、その分を割り引いて考える必要のあること先に同じであるが、ここでもやはり皇極紀でのそれと平行的な現象が見出されるようである。結局、音仮名の原音声調を通じて見る限りにおいては、両巻の音仮名表記に相関性が認められると言い得よう。

ところで、書紀の散文部分が歌謡を導入するに際しては、一般に「歌之曰」「作歌曰」等の形式が用いられるのに対し、神武紀には「御謡之曰」「謡曰」といった特殊な例があり、皇極紀以後に散見する「童謡曰」「謡歌」等とともに他巻とは異なる特色を見せている点、右と関連して興味深いものがある。[8] また、神武紀歌謡はすべて「来目歌」と称す久米氏伝承の古歌謡であるが、『古事記』の共通歌謡中にわずか1例ながらアクセント注記(声注)の存することも見逃せないところである(記14番歌謡。これは紀12番と同一の歌謡である)。これらの事実は、〝原資料〟との関連をも考慮に入れるべきことを示唆するものかも知れないが、一切後考にまつ。いずれにせよ、書紀区分論における神武紀の位置に関しては、各方面からの再検討が必要かと思われるのである。

次に、注目すべき歌謡のいくつかについて、左記のような基準のもとに作図を施し、音仮名連続上における原音各調類の配列と、古写本におけるその音仮名連続への差声状況とを対照させておくことにする。

(1) 音仮名原音声調の各調類のうち、平声に左傍線、非平声に右傍線を施す。但し平声・非平声に亙る複調字には傍線を施さない。

(2) 古写本声点については、1声点に左傍線、非1声点に右傍線を施す。

(巻一神代紀上)

1 夜句茂多菟　伊弉毛夜覇餓岐　菟磨語昧爾

去去平去　平上平去去去平　去去去上去上

2 2 2 2 1 2　1 2 1 2 2 1 2 1 2　2 12 2 2 2

夜覇餓枳菟倶盧　贈廼夜覇餓岐廻

去去去上去平平　去上去去去平平

2 2 2 2 12 1 1 2　2 2 2 2 2 12 12 2

(巻二神武紀)

11 愛瀰詩烏毗儞利　毛毛那比苔　比苔破易陪廼毛

去上平平平去去　平平平上平　上去平去去平上平

2 2 12 2 1 2 1　1 1 1 1 1 1 1　2 1 2 2 12 1 1

多牟伽毗毛勢儒

平平平平去平

1 1 1 1 1 2 1

12 哆哆奈儀弖　伊那瑳能椰摩能　虚能莽由毛

去去上上去平　平平平平平　平平上平平

1 1 2 1 2　1 1 1 1 1 1 1　1 1 2 1 1

易喩耆摩毛羅毗　多多介陪磨　和例破椰隈怒

去去平平平　平平去平去　去去平平上

1 2 1 1 1 2 1　1 1 2 1 1　1 2 2 1 1 2

之摩途等利　宇介臂餓等茂　伊莽縁開珥虚禰

平去平上去　上去去去上去　平上去平去平上

1 1 1 2 2　2 2 2 2 ○ 2　1 2 12 1 2 1 1

14 瀰都瀰都志　倶椰能故邏餓　介耆茂等珥

上平平上去　平平平去去去　去平去上去

1 1 1 1 1 1　1 1 1 2 2 2　2 2 2 2 2

宇恕志破倆介瀰　勾致弭比倶　和例破莽縁例儒

上去去去去去上　去去上去平　平去去去去去平

2 2 2 2 2 2 2 2　2 2 1 2 1　1 2 2 2 2 2 1

于智弖之夜葬務

(巻十四雄略紀)

82 瀾致傍阿賦耶　嗚之慮能古　阿母傍擧曾

枳擧曳儞阿羅每　矩傍傍播　枳擧曳底那

(巻二十四皇極紀)

107 伊波能杯傍　古佐服渠梅野倶　渠梅多傍母

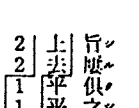
多嚢底騰哀囉栖　歌麻之之能烏賦

109 波咨波咨爾　梁騰曾枳擧喩歴　之麻能野父播羅

倭例播禰始柯騰　比騰曾騰余謀須

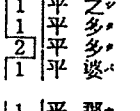
110 烏智可梅能　阿娑努能枳々始　騰余謀佐儞

于都倶之伊母我　磨陛左枳湟渠衰

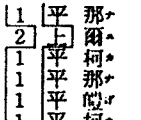


(巻二十五孝徳紀)

114 模騰巣等爾　婆那播左騰騰模　那爾騰柯母

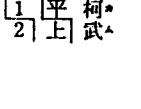


伊磨紀那麼　乎武例我禹杯爾　倶謨娜尼母



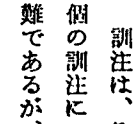
(巻二十六斉明紀)

116 伊磨紀那麼　乎武例我禹杯爾　倶謨娜尼母

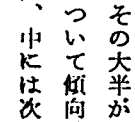


旨歴倶之多多婆　那爾柯那嘆柯武

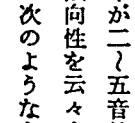
于都倶之枳　阿餓倭柯枳古弘　妖岐底舸庾舸武



123 枳瀾我梅能　姑裒之枳舸羅儞　婆底底破底



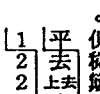
舸矩野姑悪武謀　枳瀾我梅弘報梨



2　訓注

訓注は、その大半が二～五音節のものであり、個個の訓注について傾向性を云々することは一般に困難であるが、中には次のようなものもあり、注目される。

（巻一神代紀上）





（巻二神代紀下）

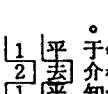
〔表Ⅵ〕

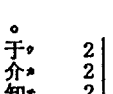
巻数	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二
訓注件数	91	42	45	2	7	6	11	5	6	5	3	3
音仮名延べ数	376	149	158	×	×	21	×	×	×	×	12	5
対応率	73	84	79	×	×	76	×	×	×	×	(75)	(80)

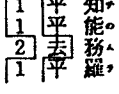
巻数	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	廿	廿一	廿二	廿三	廿四	廿五	廿六	廿七	廿八
訓注件数	5	9	15	2	3	3	4	1	3	2	1	5	7	12	0	2
音仮名延べ数	×	×	62	2	6	×	×	1	6	4	×	14	12	27	／	4
対応率	(62)	66	71	(50)	(100)	×	×	(0)	(50)	(25)	×	(86)	(75)	67	／	(50)

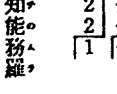
次に各巻単位での対応率を算出すると〔表Ⅵ〕のようになっている。全体の半数以上が巻一～三に集中するなど、訓注そのものに分布差があるうえ、声点との対照をなし得なかった巻々（×印）も少なくなく、右表から歌謡の場

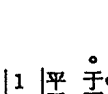
（巻三神武紀）

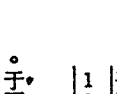


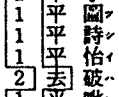


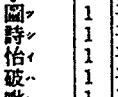




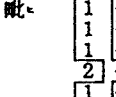


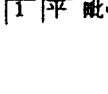






（巻十五顕宗・仁賢紀）







次に各巻単位での対応率を算出すると〔表Ⅵ〕のようになっている。全体の半数以上が巻一～三に集中するなど、訓注そのものに分布差があるうえ、声点との対照をなし得なかった巻々（×印）も少なくなく、右表から歌謡の場

合の如き巻による傾向差を見出すことは困難のようである（音仮名延べ数＝原音調類と声点との対照をなし得た音仮名の延べ数＝の20に満たない巻の対応率は括弧に入れて示した）。ただ、訓注量の多い巻一～三が示す対応率には一応見るべきものがあるように思う。

3 まとめ

以上の観察結果をまとめると次のようになろう。

〈c1〉歌謡音仮名表記の一部、ことに巻三、巻二十四～二十六のそれにおいては、《平声——1声点、非平声——非1声点》の対応を示す傾向が強いが、それら諸巻の分布は書紀区分論との関連を予想させ、そこに特定の表記態度の存在を想定し得るであろう。

〈c2〉訓注音仮名表記については、歌謡の場合の如き傾向差は見出し難いが、巻一～三が示す対応率には一応注意せられる。ただし巻二については歌謡音仮名との関連が気にかかるところである（〔表Ⅳ〕参照）。なおよく検討すべき点も多いが、我々はここで次の如き推論を成し得るであろう。

(I) 書紀音仮名表記の一部においては、音仮名連続上における原音声調の配列に、書紀述作時の日本語（中央語）のアクセントが反映している。

(II) その際、音仮名原音声調の、平声と非平声が対立的に機能している。

具体的な調値については、奈良時代中央語のアクセント体系ならびに中国中古音声調の調値が現段階ではともに解明されておらず、確たるところは導き得ないが、声点が示す平安末期頃における各音節の調値[9]、及び唐代後半期頃の中国西北方音の調値を反映すると思われる漢音声調の調値[10]等を拠案すると、低平調の拍に音仮名原音平声、非低平調の拍に非平声が対応した可能性が高いかと思われる。尤も声点との対照に関する限り原音上声と去声との間にさしたる傾向差が看取されなかったことから、仮にそれらを非平声として一括して来たわけである（入声の音仮名は極く僅少である）が、調値の面からみて果して両者が同一の機能を荷い得たかどうか、なお検討を要するであろう。次章に示す〔表Ⅶ〕など、その点に関して示唆するところがあると言えようか。

また、調値を問題にするならば、中国中古音における陰調・陽調の発達時期にも留意する必要があろう。この現象は唐代における全濁声母無声音化の傾向と密接な関係にあるが、書紀音仮名にその全濁声母無声音化の反映が見られるのは諸家の指摘するところである。従ってその原音の音系においては、旧来の清濁の区別を補って音節発端高度の差異が弁別を助けていたものと想像され[11]、書紀述作者がそのあたりを如何に聴きなしたものか、一考を要するであろう。すでに見て来た諸現象——〈b1〉〈b2〉〈c1〉〈c2〉等——や、岩崎本の二巻について行なった原音頭子音と声点との対照作業[12]からは、それが四声の枠内で把握されていたであろうとの推測を一応得るが、全濁声母無声音化は頭子音の調音様式によって進行に遅速があるという指摘[13]もあり、なおよく考えるべき点が多い。

四

以上、同音節複数字母の音的側面からの再吟味を経て、書紀音仮名表記の一部においては原音声調と述作時の中央語アクセントとの間に相関性の存する可能性があることを指摘した。

さて、漢語のアクセント型形成にその漢字の原音声調が関与したという指摘もあるように[14]、漢字音摂取の当初においては、声調の如きsuprasegmentalな要素も字音を構成する有機的成分として把握し受け入れられて来たよう

〔表Ⅶ〕

巻	a．音仮名延べ数		b．音仮名字種数			区画
	上声字	去声字	上声字	去声字		
一	4	17	4	8	●	β
二	35	109	12	40	●	
三	40	146	12	44	●	
五	24	75	11	28	●	
七	26	66	13	31	●	
九	38	90	16	29	●	
十	55	108	21	28	●	
十一	119	285	27	53	●	
十二	2	13	2	12	●	
十三	45	94	16	40	●	
十四	140	104	30	35		α
十五	32	23	22	16	○	
十六	81	61	22	24		
十七	121	74	32	30	○	
十九	20	8	10	5	○	
廿二	37	59	15	21	●	β
廿三	0	10	0	9	●	
廿四	64	31	23	17	○	α
廿五	22	16	13	10	○	
廿六	63	23	19	14	○	
廿七	42	41	19	20		

○＝a・bともに上声字優勢の巻
●＝a・bともに去声字優勢の巻

である。また、後世の知識層が漢字音の学習・伝承に際して声調にも充分注意を払って来たことは、今に伝わる多くの文献資料の教えるところでもある。ところで森博達氏は、書紀歌謡が音仮名とその漢字原音との対応状況の差

異によって二群に分割できるとし、一をα群、一をβ群と命名された（〈表Ⅳ〉のD参照）うえで、β群に日本的漢字音を背景とする音仮名が少なからず含まれているのに対し、α群の音仮名は原則として漢字原音（唐代西北方音）を背景に成り立っている、との見解を示された。[15] 今、森氏の特に言及されなかった原音声調についてこれを見るに、《その出現頻度において、上声字が去声字に比して優勢な巻はすべてα群に属し、逆に去声字の優勢な巻はβ群に属す》という現象が観察される（〈表Ⅶ〉）。音仮名の背景にある漢字音（segmental な部分）の分析に拠ってなされた各巻の分類に、声調における傾向差――その差異の意味するところは別個に考えるとして――がよく呼応している点で注目に値しよう。[16] これは、書紀述作者たちによる音仮名字種の選択も声調を全く捨象してなされたわけではなかったのではないか、との推測を許すものとは言えないだろうか。

一方、自国語のアクセントについても、恐らくは漢字音との接触以来、多く注意の払われて来たことは、今に残る数々のアクセント資料からも容易に知り得るところである。就中、書紀とほぼ同時代成立の『古事記』に若干のアクセント注記（声注）が見られること、[17] 及び、時代はやや降るものの「金光明最勝王経音義」和訓にアクセントによる音仮名の使い分けが存することの[18]二点は、その時期（前者）その原理・方法（後者）において、ことに興味をひく事実と言えよう。また、書紀音仮名表記がその範を仰いだとされる、漢訳仏典の音訳漢字において、声調が梵語音の標示に機能的に参与している――母音の長短に関してであるが――という指摘[19]のあることも、この場合無視し難く思う。

いずれにせよ、純粋に書紀音仮名表記内部から、一つのアクセント体系をどの程度帰納し得るものか――、その点を明らかにすることが肝要であろう。これはまた稿をあらためて考えてみたいと思う。漢音・呉音声調の調類と調値の問題、あるいは個々の書紀古写本声点の資料的信頼度の吟味等々、作業過程において残して来た問題も少な

くない。諸賢の御批正を賜われば幸いである。

注(1) 岩崎本の本文及び声点は、築島裕・石塚晴通『岩崎本日本書紀』(日本古典文学会刊)に拠る。声点は朱初点(平安中期末点)のみを考察の対象とする。

(2) 拙稿「原音声調から観た日本書紀音仮名表記試論」(『語文研究』51、昭56・6)一四ページ参照。

(3) 龍宇純『唐写全本王仁昫刊謬補缺切韻校箋』(香港中文大学刊)の原本葦本を使用。

(4) 「広韻」にも見えぬ漢字の処理については、注(2)文献同ページ参照のこと。

(5) 注(2)文献同ページ参照。

(6) 各古写本声点は左記のものに拠った。

A＝注(1)文献。B・C＝『秘籍大観』(大阪毎日新聞社刊、大15)。D_1・D_2・D_4＝貴重図書複製会刊の複製本(昭16)。E＝赤松俊秀編『国宝上部築方自筆日本書紀神代巻』(宝蔵館刊、昭46・12)。F＝金田一春彦博士の御好意により、博士御撮影の写真(歌謡部分)を利用させていただいた。

なお、B・Cについては石塚晴通氏の御調査(『北海道大学文学部紀要』40～44)をも参照した。

(7) 藤井信男「日本書紀各巻の成立の一考察」(『大倉山論集』1、昭27・6)参照。

(8) 太田善麿『古代日本文学思潮論(Ⅲ)——日本書紀の考察——』六三ページ参照。

(9) 金田一春彦「類聚名義抄和訓に施されたる声符に就て」(『橋本博士還暦記念国語学論集』昭19・10所収)。小松英雄「和訓に施された平声軽の声点——平安末期京都方言における下降調音節の確認——」(『国語学』29、昭32・6)等参照。

(10) 金田一春彦「日本四声古義」(『国語アクセント論叢』昭26所収)。頼惟勤「漢音の声明とその声調」(『言語研究』17 18、昭26・3)等参照。

(11) 平山久雄「『史記正義』「論音例」の「清濁」について」(『東洋学報』56—2 3 4、昭50・3)等参照。

(12) 岩崎本推古紀・皇極紀の音仮名を対象に、原音頭子音の清濁(「韻鏡」の枠組に拠る)と声点の加点状況とを対照させてみたが、その限りにおいてはさしたる傾向性は看取されなかった。なお、対立する無声音をもたない所謂清濁音(次濁音)が陰調陽調のいずれの系列に属するかについてはいくつかのケースを想定し得るが、如何ように整理しても結果は変らないようである。

(13) 水谷真成「唐代における中国語語頭鼻音の Denasalization 進行過程」(『東洋学報』39—4、昭32・3)

(14) 金田一注(10)文献、奥村三雄「漢語アクセントの一性格」(『国語国文』33—2、昭39・2)等参照。

(15) 森博達「《日本書紀》歌謡における万葉仮名の一特質—漢字原音より観た書紀区分論—」(『文学』45—2、昭52・2)

(16) 拙稿「書紀歌謡音仮名と原音声調」(『文献探究』10、昭57・9)

(17) 小松英雄『国語史学基礎論』(笠間書院、昭48)等参照。

(18) 金田一春彦「金光明最勝王経音義に見える一種の万葉仮名遣について」(『国語と国文学』24—11、昭22・11)

(19) 水谷真成「梵語音を表わす漢字における声調の機能——声調史研究の一資料——」(『名古屋大学文学部二十周年記念論集』昭44所収)